

『新體詩抄』に於けるテニスの譯詩二篇

衣 笠 梅 二 郎

明治初年に於て、西洋の詩歌、特に英米詩歌の形式を取り上げ、その精神を汲み入れて、日本古来の長歌の形式と類似しながらも、しかも別個に存在の理由を明らかに意識して、新たに創造せられた新詩型が新体詩である。この新らしい詩は明治十五年八月に刊行された外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎合著『新体詩抄』を通じてその生誕を見た。成程、新体詩はその名は新体ではあつたが、声調は低く且つ陳腐を極め、用語の自由を主張したものの却つて蕪雜に過ぎ、表現の自在を期したのはよいがために詩趣を失い、不幸にして当時の文壇の人々から嗤笑を買つた。やがて新体詩は非芸術的な石器時代の遺作として、時代の推移に従つて葬り去られる運命にあつたが、新体詩なる新らしい一石が明治文壇に投ぜられると共に、ここに新しい波紋が描き出され、この波紋は次第に拡大して、遂には旺盛な明治新詩壇の興隆へと波動するに至つたのである。『新体詩抄』所載の十九篇の中、創作詩は僅か五篇に過ぎず、訳詩は十四篇の多数に上つてゐる。そしてこれ等の原詩は殆んどすべてが英米の詩である。訳詩の中には英國の桂冠詩人、アルフレッド・テニスン(Alfred Tennyson, 1809—92)の作が二篇数えられる。今、この二篇の訳詩を一瞥するのが本稿の目的である。

『新体詩抄』所載「テニスン氏輕騎隊進撃の詩」はテニスンの作になる、“The Charge of the Light Brigade”の翻訳である。訳者の、山仙士、外山正一はこの訳詩の前書として次のように記している。「左の詩は一千八百五十四年英佛の兩國土耳其を援けて魯西亜と兵端を開き遂に高名なるクライミヤの戦争となり此間数多の合戦此処彼処に在りたる

『新体詩抄』に於けるテニソンの訳詩二篇

中最有名なものは同年六月廿五日バラクラバの戦争にて英国の輕騎隊六百騎が目之余の敵の大軍中へ乗り込み古今無双の手柄を顯はしたれども惜い哉衆寡素より敵し難く其大概是討死し或は擒にせられ無難に帰陣したる者甚僅にて有きと当時英国に有名な詩人テニソン氏が其進撃の有様を吟味したる者にして何国人に限らず苟も英語を解するもの此詩を暗誦せざるなしといふ」

一八五一年、フランス大統領、ルイ・ナポレオンは武力をもつて反対党を抑圧し、憲法を改正して大統領の任期を十年となし、翌年には国民の総投票に向うて帝位に上り、ナポレオン三世と称した。次いで彼は外交上華々しい活躍をして、帝位を安固にしようと考え、トルコからパレスチナ聖蹟管理權を獲得した。かねて南下の機會を窺つていたロシア皇帝、ニコラス一世はこの機に乗じて、トルコ領土内の全ギリシャ教徒の保護權をトルコに強要したが、ロシアの野心を看破した英国は、トルコにこれを拒絶させた。ここに於てロシアは大いに怒つて、一八五三年トルコに侵入した。フランスは英国と結んでトルコを援け、遠くクリミア半島に出兵し、サルジニヤの援兵をも併せて、セバストポールの要塞を包囲し、一八五五年、遂にこれを陥落せしめた。戦役中にロシア皇帝ニコラス一世は崩御し、アレキサンドル二世が帝位を継承した。新皇帝は平和を希望したので、一八五六年、連合国とパリ条約を締結して和を講じた。

その全文を引用した、山仙士訳「テニソン氏輕騎隊進撃の詩」の前書にも記してあるように、上記のクリミア戦争 (Crimean War) に於ける華々しい戦闘を歌つたのが、この「The Charge of the Light Brigade」である。明治四十一年九月、東京、大阪、宝文館発行、中学英語研究会編纂『最新最詳高等英語独修書』は原詩と共に、山仙士の訳詩を掲げて、次のような解説を試みている。「此詩の來歴は 1854 年英佛及び土耳其が同盟して露西亜と戦を交へし時聯合軍は Crimea の Sebastopol を攻撃せり。Sebastopol は露軍堅く守りて難攻不落の地と称せり。之より少し南に隔りて Balaclava と称する港あり。ここに聯合軍の兵糧援兵など到着したり。十月露兵は此港と聯合軍との通路を断たんとして進撃せり。此時有名なる Heavy Brigade (猛進兵) 起りて露軍は退けられたり。同時に露軍の砲兵本隊

を攻めんがため Light Brigade (軽騎隊) が英軍より發せり。此詩は其状況を表はしたるものなり。」

明治四十一年七月、三省堂書店發行、桃澤、宮森麻太郎、潜龍、小林安太郎訳註『英米百家詩選』にも、原詩と共に「軽騎隊の進撃」と題して訳註者の訳詩が收載されている。本書にもこの詩に關して簡単な解説が附してあつて、本詩を更に理解する一助として次にその全文を引用しよう。「一千八百五十四年英佛兩國土耳斯ヲ助ケテ、露國ヲ伐テル時、聯合軍ハ Crimea 半島 Sebastopol 城ヲ包囲セリ。同年十月二十五日露軍ノ一大隊、囲ヲ衝テ出テ聯合軍ガ糧食援兵ヲ上陸セル Balaclava 港ト聯合軍トノ聯絡ヲ絶タントセシガ、聯合軍ノ一部隊苦戦シテ之ヲ撃退ス。而シテ僅ニ六百名ヨリ成レル英國ノ軽騎隊ハ優勢ナル敵ノ砲兵隊ニ向ツテ突進シ、拔軍ノ勦ヲ為シテ引返シシガ、生存者ハ百九十八名ナリシト云フ。原詩雄壯活潑、読ンデ第三第四第五節ニ至ラバ、千軍萬馬馳突砲声轟々天地ヲ震撼スルノ状ヲ目睹スルノ感アリ。真ニ千歳不朽ノ名吟ナリ。」

一八五四年、十月二十五日はクリミア戦争が始まつて約一箇月程経過した頃である。既に掲げた、山仙士の訳詩の原書に六月廿五日と記されているのは、何か不測の誤謬によるものであらう。この日、ロシア軍は早朝に連合軍の兵站の根拠地、バラクラバを脅やかそうと企てたが、その騎兵隊はヘヴィ・ブリゲイド (Heavy Brigade) のために阻止された。同じ日の午前十一時頃、第四、第一三輕騎兵、第八、第一一驃騎兵、第一七槍騎兵から成り、六七三名を算するライト・ブリゲイド (Light Brigade) は、丁度一哩半離れた谷の一端に陣を布いている、ロシア軍の砲兵隊を攻撃するように命ぜられた。ところが、この命令は実は不幸にも誤つて受取られたのである。然し、英軍の輕騎隊は勇猛果敢な突撃を試み、無事に生還した者は僅か一九五名に過ぎなかつた。テニソンは同年十一月四日發行の『タイムズ』(“The Times”) の戦況記事に驅られて、間もなく詩作の筆を執つたのである。同紙には攻撃に参加した將兵の数が六〇七名と報道されていて、テニソンの詩に六百騎と歌われているのはこれに從つたがためである。この詩は同年十二月二日、僅かの時間にて纏められ、同じ月の九日、『エギザミナー』(“The Examiner”) 紙上に初めて發表された。

『新体詩抄』に於けるテニソンの訳詩二篇

「テニソン氏輕騎隊進撃の詩」の原詩は六節から成つてゐるが、訳詩に於ては第一節と第二節とが一つの節につづめてあるために、結局五節から成つてゐる。訳詩の最初の部分は從來屢々隨所に引合ひに出されていて、それ丈広く人々の口の上つて來たものである。然し、その全篇、しかも原詩と対照しての引用は余りにその例を見ていない。従つて次に訳詩とこれに対する原詩とを掲げよう。

其 一

一里半なり一里半

並ひて進む一里半

死地に乗り入る六百騎

將は掛れの令下す

士卒たる身の身を以て

訳を糾すは分ならず

答をなすも分ならず

これ命これに従ひて

死ぬるの外はあらざらん

死地に乗り入る六百騎

其 二

右を望めば大筒ぞ

前も左りも又筒ぞ

共に打出す砲声は

天に轟くいかつちの

響の如く凄まじや

彈丸雨飛の間に

猛り立てぞ進むなる

死地にこそ入れ鱈の口

勇んで乗り入る六百騎

其 三

抜けば玉ちるやいばをば

皆もろ共に振あけて

きら／＼と輝けり

敵陣近く乗り掛けて

大砲方をなで切りす

煙の中に飛込みて

太刀の早業見ごとなり

遂にさゝふる事ならず

馬の頭ぞ立直す

残るはいとゞわづかなり

其 四

右を望めば大筒ぞ

共に打出す砲声は

弾丸雨飛の其中に

死地より出てゝ乗り帰へす

帰るは元の一里半

残るはいとゞわづかなり

其 五

あゝ勇ましきものゝふの

手柄は永く伝へなん

とる年あまた重りて

頭に霜を戴きて

六百人の豪傑が

最と目冷しき働きぞ

烈しく陣を破るなり

敵の軍勢たち／＼と

むら／＼ばつとむらくづれ

以前に進みし六百騎

左りも後も又筒ぞ

天に轟くいかづちぞ

從横むじん切り靡く

鰐の口より脱れ出て

六百人の其中で

よに香しき其誉

今のをさなご生立ちて

腰は梓の弓となり

孫ひこやしやご多き時

敵の陣へと乗り入れる

I

Half a league, half a league,

Half a league onward,

All in the valley of Death

Rode the six hundred.

'Forward, the Light Brigade !

Charge for the guns ! ' he said :

Into the valley of Death

Rode the six hundred.

II

'Forward, the Light Brigade !'

Was there a man dismay'd ?

Not tho' the soldier knew

Some one had blunder'd :

Their's not to make reply,

Their's not to reason why,

Their's but to do and die :

Into the valley of Death

Rode the six hundred.

III

Cannon to right of them,

Cannon to left of them,

Cannon in front of them,

Volley'd and thunder'd;

Storm'd at with shot and shell,

Boldly they rode and well,

Into the jaws of Death,

Into the mouth of Hell

Rode the six hundred.

IV

Flash'd all their sabres bare,

Flash'd as they turn'd in air

Sabring the gunners there,

Charging an army, while

All the world wonder'd:

Plunged in the battery-smoke

Right thro' the line they broke;

Cossack and Russian

Reel'd from the sabre-stroke

Shatter'd and sunder'd.

Then they rode back, but not

Not the six hundred.

V

Cannon to right of them,

Cannon to left of them,

Cannon behind them

Volley'd and thunder'd;

Storm'd at with shot and shell,

While horse and hero fell,

They that had fought so well

Came thro' the jaws of Death,

Back from the mouth of Hell,

All that was left of them,

Left of six hundred.

VI

When can their glory fade ?

O the wild charge they made !

All the world wonder'd.

Honour the charge they made !

Honour the Light Brigade,

Noble six hundred !

・山仙士が中村正直を加えて十三名の者と共に、幕府の留學生として英國に向つて横浜を出発したのは、慶応二年（一八六六年）十月のことであつた。滞英中、日本に於ては国状が一変して王政維新となり、幕府からの学資金送達途が杜絶したので、彼等は止むを得ず明治元年（一八六八年）の四月にロンドンを後にして同年六月に横浜に帰還した。即ち、彼等が渡英した当時はクリミア戦争から丁度十年後のことであつて、テニソンは老来愈々健在にて詩筆を振つていた。図らずも幕府の倒潰のために、彼等の留學の期間は短日月に終り、しかもみじめな結末を見たのではあるが、山仙士を始めとしてその他の留學生達が、本来の學問の外に異國の風物に接して得た知識は少なくはなかつた。明治維新後の新日本の精神界に、多大の影響を与えた訳書の一つとして挙げられる『西国立志篇』も、中村正直がこの留學によつて得た收穫である。その後、明治三年（一八七〇年）、山仙士は外務省籍務少記に任ぜられ、森有礼に隨行して渡米したのであるが、これより先、彼が英國留學中、かねて日本に於て修めた英語の素養を深めたことは勿論、英詩についての知識の如きも多少、習得したであろうことはここに喋々するまでもない。

既に述べたように中学英語研究会編纂『最新最詳高等英語独修書』には、原詩と共に、山仙士の「輕騎隊進撃の詩」

『新体詩抄』に於けるテニソンの訳詩二篇

を転載して、「以上は早くより世に伝はりし訳歌なるを以て茲に録せりされども所々原文と適合せざる所あり特に末節は全く原文と異れり読者よく注意せらるべし。」と書き添えてある。このように原詩に忠実な訳詩ではないが、「新体詩抄」所載の、山仙士の訳詩の中では、寧ろこの訳が遙かに勝れている。成程、冗慢に陥り易い七五調にて訳してあるが、簡潔な語句を用いて句を切り節を整えて、一種の雄勁な調子を醸し出している。なお、山仙士がこのテニソンの戦争詩の訳詩、及び軍歌として歌われた創作詩「抜刀隊の詩」に於て、偶々、相当の成功を収めたのは、幕臣の子弟としての彼の生来の武士気質が、興かつて力があつたことも考えられる。また、この戦争詩の訳詩が「抜刀隊の詩」と共に、『新体詩抄』所載の他の訳詩に比して、かねて一般から迎えられたことに就いては、明治時代の華やかな軍国主義の思潮が、可なり強く影響したことも否めない。

上記の『最新最詳高等英語独修書』には、山仙士の訳詩を掲げて、「更に成るべく原文の意に近く訳さん。」と記して、遂次訳にしては比較的巧者に翻訳が試みられている。また、原詩の「語句の研究」をも掲げ、「Charge for the guns! (砲兵を進撃せよ)」は Lord Raglan 將軍の下したる命令なり而して輕騎隊の或者は誤りて砲兵とは敵の本營に在る砲兵なりと思ひて進みしなり。he とは輕騎隊の指揮官 Lord Raglan なり。」と詳細な註釈を加えている。その訳詩を全篇ここに掲げる余裕はないが、最初の二節を参考のために次に引用しよう。訳語の中には、山仙士のそれを踏襲したと認められるものもある。

半リীগ半リীগ

半リীগ進み

六百騎悉く

死地に乗り入る。

進め輕騎隊

砲兵を撃てと將は令しぬ

六百騎

死地にぞ乗り入る。

進め輕騎隊。

こは誤りと卒は知れども
怖るゝ者とて

一人もなかりき

答ふるさへ其分ならず

わけを糾すも分ならず

たゞ進みて死するのみ

六百騎

死地にぞ乗り入る。

宮森桃潭、小林潛龍訳註『英米百家詩選』に於ては、訳註者の訳詩の後に左記のような批評が行われている。「此詩人口に嚙炙し読むもの漫に意氣の軒昂たるを覺ゆ。過ぎし日清戦役にも日露戦役にも之に優る好資料幾多提供せられたれども、我邦の詩人採つて以て不朽の名作を出せるものなきは如何。一国の運命を賭したる大戦役の紀念余りに寂寞たらずや。」なお、既に掲げた訳詩とも比較対照するために、煩を厭わずに同じく第一第二節に対する訳を次に引用しよ

『新体詩抄』に於けるテニスの訳詩二篇

う。原詩の意味を十分に伝えようと努力しているのは認められるが、それだけ散文化して詩的佳調を失い、この点に於ては寧ろ、山仙士の訳詩に一步を譲つてゐる。

一

一里半、一里半、

前進すること一里半、

六百名の輕騎隊は

『死の谷に』赴けり。

司令官は『進め輕騎隊、

敵の砲門に向ひて進撃せよ』と命令し、

六百の兵士は

『死の谷』に赴けり。

二

『進め輕騎隊』、

此の命令に接して、勇氣を挫けるものありしか。

否々兵士は大失策を為したるものあるを

知ると雖ども、敢て恐怖せざるなり。

彼等の任務は推し問答を為すにあらず。

理由を喋々するにあらず。

唯命令を行ひ職に殉するに在り。

六百の兵士は

『死の谷』に乗り込めり。

『新体詩抄』に於けるテニソンの訳詩としては、「テニソン氏輕騎隊進撃の詩」の外に今一篇、「テニソン氏船將の詩（英國海軍の古譚）」がある。これはテニソンの作詩、「The Captain, a Legend of the Navy」の全篇を訳出したものであつて、訳者は尙今居士、即ち矢田部良吉である。かねて英國の軍船に於て、船人達は船將の暴威圧制を快よく思わず、彼に対して深く怨みを抱いていた。偶々、大海原の真中で仇敵のフランスの軍船と遭遇したところ、彼等は功名心に燃える船將をただ睨みつけ、空しく腕をこきぬいているのみで、敵船に向つて砲火を開こうとする者は一人としてなかつた。ところが、敵の砲丸はまるで雷のように、天地も裂けるばかりに英國の軍船に落下して、帆柱は打ち砕かれ、船上は血潮の海と化した。遂には船人のみならず船將もまた傷つき仆れて、軍船もろ共に水層となつて海底に沈んだという、英佛海戦の古譚を歌つたものである。

この訳詩は同じ戦争詩でありながら、「テニソン氏輕騎隊進撃の詩」のように、後年、人口に膾炙することもなく、また、他の訳者達によつて繰り返し翻訳されることもなかつた。その歌われている内容は長上に随従することを、古来、殆んど絶対的のものと信じて來た私達日本人には、到底思ひ及ばない結構のものである。この点から考えても、この訳詩は明治時代の軍国調には寧ろ合致しなかつたのであつて、「テニソン氏輕騎隊進撃の詩」のように、広く一般から迎えられる主題のものではない。然しながら、明治維新後澎湃として起つた自由主義、或は民権主義の激しい思潮を回顧するならば、このような詩の翻譯が試みられた所以を、幾分首肯することが出来る。しかも、尙今居士はかねて明治三年（一八七〇年）高橋是清の斡旋によつて外務省文書大令使に任ぜられ、森有札の秘書官の格で渡米したのであつて、その後、コーネル大学に学び、明治九年（一八七六年）業を卒えて帰朝したのである。彼が新興民主主義の合衆国

『新体詩抄』に於けるテニソンの訳詩二篇

に学び、新しい思想の洗礼を受けたことを思えば、彼が特にこのような訳詩に指を染めたことは更に納得がゆくであらう。

従来、「テニソン氏船将の詩」の原詩は、屢々テニソンの作詩、「Revenge」であると誤り伝えられている。成程、テニソンには“The Revenge, a Ballad of the Fleet”と題する十四節から成る詩篇があるが、これは訳詩と原詩とを比較対照すれば、直ちに認められる誤謬である。恐らく紹介者の偶然的な、何等かの錯誤から生じた不測の過失であらう。原詩の“The Captain, a Legend of the Navy”という詩題の“The Captain”を「船将の詩」、副題の“a Legend of the Navy”を便宜上、「英国海軍の古譚」と訳してあるのを見ても、容易にそれと推定されるのである。この詩は一八六五年に刊行された、彼の選集に初めて収録されたものであつて、これは尙今居士渡米の数年前のことである。原詩は七十二行から成つてゐるが、訳詩では七五調の詩句を二句宛一行に重ねて、五十行に纏め上げてある。原詩が正しく伝えられていないこの訳詩のために、次に訳詩と原詩とを全篇引用して、校合のよすがに供するのも徒勞ではないと思われる。

暴威を以て下を馭す

天地も容れぬ罪なるよ

阿鼻の地獄も及ばじな

嗜まんものゝあるならば

其身を深くいましめよ

将たる船の乗組は

英吉利国の人なれば

人は此世の鬼なるぞ

其過ちの深きこと

若しや今しも圧制を

わが此歌をよく聴て

曾て勇々しき武士の

自由の空氣吸ひなれし

勇のみならず信あれど

其船將の圧抑を

將が性質猛くして

無きのみならず針ほどの

免すこと無し斯て世に

船人^{びと}どもの心中に

消るひまなくなかくに

人をも身をもる共に

船將常に望むらく

わが船の名を轟かし

千萬人に呼ばれんと

湊に過り岡に沿^そひ

北に南に何処^{そこ}となく

大海原^{おほうみはら}の真中にて

帆を打揚けて来る船は

軍の船にまぎれなき

喜び外にあらはれて

船人どもゝ銘々の

眼の中におのづから

將は声色高らかに

深く怨みて惜かずとよ

慈愛の心露ほども

罪も厳しく糺し問ひ

將が暴威はいやつとり

燃る怒のそのほのほ

をりさへあらば燃え出でゝ

焼かんとすなり然れども

いつか勲功^{いさばし}あらはして

古今未曾有の英雄と

一途にこゝろ傾けて

岬^{みさき}を廻り島を歴て

残るくまなくたゞ渡り

北をはるかに眺むれば

是ぞ正しく佛蘭西^{まき}の

わが船將の面色^{おもいろ}は

言葉もいとゞいそがはし

心にたくみありければ

喜ぶ色の見えたりし

ものども船を追ふべしと

『新体詩抄』に於けるテニソンの訳詩二篇

一と号令を下すまゝ

敵にまちかく進みゆく

常に怨みし大将を

大砲はなつものはなし

実にいかつちの落るごと

天地も破裂するばかり

帆架もわれてこな微塵

銃丸繁くふりきたり

甲板のみか帆柱も

生きとし生けるもの共は

もの言ふこともかなはねば

見合す姿凄まじく

絶えんとしつゝ船將を

嘲り笑ふ気色あり

頼みし人もことごとく

われを売りしぞ口惜き

辱と恚のせりあひに

齒かみをなして叫べども

かばねの上に倒れけり

風にまかせて我船は

こゝに乗組一同は

にらみて腕を又きて

されど敵の大砲は

轟きわたるおそろしさ

横木も折れて波に落ち

甲板裂けて容なく

雨かあられか怖ろしや

人の脳やら血汐やら

右に左にうち倒れ

倒れしまゝに顔と顔

血汐の中に玉の緒の

見かへる眼おのづから

將は功名立てんとて

我を嘲りにらみつゝ

心のうちは堪へられぬ

顔色青く赤くなり

終に痛手の疵おひて

嗚呼圧制よ嗚呼暴威

実に怖るべし悪むべし

数多の勇士いたづらに

失ひしこそはかなけれ

其のち多く年月を

経ぬとはいへど船將や

船人どものしかばねは

水層みづぐさとなりて海底に

今も沈みて残るらん

さりととも見えぬ海の上に

浮べる鷗う二三ふたつみづう四

He that only rules by terror

Doeth grievous wrong.

Deep as Hell I count his error.

Let him hear my song.

Brave the Captain was : the seamen

Made a gallant crew,

Gallant sons of English freemen,

Sailors bold and true.

But they hated his oppression,

Stern he was and rash ;

So for every light transgression

Doom'd them to the lash.

Day by day more harsh and cruel

Seem'd the Captain's mood.

Secret wrath like smother'd fuel

Burnt in each man's blood.

Yet he hoped to purchase glory,

Hoped to make the name

Of his vessel great in story,

Wheresoe'er he came.

So they past by capes and islands,

Many a harbour-mouth,

Sailing under palmy highlands

Far within the South.

On a day when they were going

O'er the lone expanse,

In the north, her canvas flowing,

Rose a ship of France.

Then the Captain's colour heighten'd,

Joyful came his speech :

But a cloudy gladness lighten'd

In the eyes of each.

• Chase, he said : the ship flew forward,
And the wind did blow ;

Stately, lightly, went she Norward,

Till she near'd the foe.

Then they look'd at him they hated,

Had what they desired :

Mute with foiled arms they waited—

Not a gun was fired.

But they heard the foe-man's thunder

Roaring out their doom ;

All the air was torn in sunder,

Crashing went the boom,

Spars were splinter'd, decks were shatter'd,

Bullets fell like rain ;

Over mast and deck were scatter'd

Blood and brains of men.

Spars were splinter'd ; decks were broken :

Every mother's son—

Down they dropt—no word was spoken—

Each beside his gun.

On the decks as they were lying,

Were their faces grim.

In their blood, as they lay dying,

Did they smile on him.

Those, in whom he had reliance

For his noble name,

With one smile of still defiance

Sold him unto shame.

Shame and wrath his heart confounded,

Pale he turn'd and red,

Till himself was deadly wounded

Falling on the dead.

Dismal error! fearful slaughter!

Years have wander'd by,

Side by side beneath the water

Crew and Captain lie;

There the sunlit ocean tosses

O'er them mouldering,

And the lonely seabird crosses
With one waft of the wing.

以上の引用にて明らかなように、原詩の全篇は節に区分されていないので、訳詩もまたこれに倣つて節に分たれていない。従つて訳詩に於てはそれ丈冗長に流れている嫌いがある。しかも、原詩の揚抑格四歩句と三歩句にての佳調は全然顯みられず、退屈な七五調に捉えられて、如何にも幼稚なたどたどしい翻譯振りが目立つてゐる。もつとも、大体の意味を十分に窺がい知ることとは出来るのである。なお、『新体詩抄』所載の訳詩にて同じ訳者の筆になる、「カムプベル氏英国海軍の詩」(“Ye Mariners of England, a Naval Ode” by Thomas Campbell) も同様に海軍を歌つたものであるが、この訳詩の方が「テニソン氏船將の詩」よりも、遙かに広く一般に迎えられる。思うに兩者の用語の蕪雜や措辭の拙劣等は暫らく措いて、前者の原詩が本国の英國に於て非常に好評を博した国民歌謡であつて、しかもその詩型が後者のそれに反して、四節から成る短篇詩であることが幸いしたのである。

訳詩としての「テニソン氏船將の詩」を通覽すると、その最後の行は「さりとも見えぬ波の上に 浮べる鷗ふたつみづう二三四」の詩句にて結ばれている。この最後の句の「浮べる鷗二三四」のみは、他の句が何れも七五調であるのに反して、七調で歌われていて、これは『新体詩抄』所載の他の詩篇には見られない句法である。従つて私達は、この試みに訳者の何等かの野心的な意圖を窺がうのである。今、『萬葉集』卷第三を披見すると、葛飾の真間の手児名が墓を過ぎて、山部赤人が作つた歌に次のようなものがある。

古に (五言)

在りけむ人の (七言)

倭文幡の

帯解き交へて

.....

.....

『新体詩抄』に於けるテニソンの訳詩二篇

『新体詩抄』に於けるテニソンの訳詩二篇

松が根や

遠く久しき

言のみも

名のみも吾は

忘らえなくに（七言）

また、『古今和歌集』卷十九所載、壬生忠岑作「ふる歌にくはへて奉れる長歌」には次のように歌われている。

くれ竹の（五言）

代々のふるごと（七言）

なかりせば

伊香保の沼の

いかにして

.....

.....

おとはの滝の

おとに聞く

老いず死なすの

葉もが

君が八千代を

若えつゝ見む（七言）

上に掲げた長歌は前者も後者も共に五言をもつて始まり、七言、七言をもつて終つてゐる。ところが、前者が五七調であるのに反して、後者に於ては七五調に推移しているのが認められる。後世の七五調はこのような過程を経て発生したものであるが、「テニソン氏船将の詩」の訳詩のみが特にこの七言をもつて終る句法を採択していることは、確かに一応は注目すべきことである。恐らく訳者の尙今居士が新機軸を企図して、このような句法をも試みたのであらうと推察される。ただこのような試みでは原詩と何等の連関するところがなく、また、後世の詩壇に対しても反響を与えるに至らず、遺憾ながら空しく看過されたのである。